

中沼アートスクリーン(株) 創業者

中沼 壽 評伝

岡田 清治 著

あなたには社員の全能力を
引き出せますか！

あなたは
社員の全能力を
引き出せますか！

中沼アートのスクリーン(株)創業者

中沼 壽 評伝

岡田清治 著

あなたは
社員の全能力を
引き出せますか！



中沼アートスクリーン株式会社 中沼 壽会長

はじめに

この評伝を書くために京都の本社に中沼壽なかにほむさし社長を訪ねたのは今から二年ほど前になる。約束の時間に本社の玄関口で待ち合わせをした出版社の代表と一緒に社長室に向かった。初対面であった。

事前に会社のことや印刷のことは下調べしていたが、どういふ人物かについては、会社案内の顔写真以外にほとんど知らなかった。

未知の人物に会う好奇心と同時に不安もあって、この齡としになっても緊張感を覚えたことを記憶している。

本社に約束の時間の一時間半ほど前に着き、本社周辺を散策して地域の状況把握に努めた。記憶に留めるためにコンパクトカメラで写真を撮りながら、今から始まる物語の準備に入った。

総務の女性に社長室へ案内された。

「お客様です」

「どうぞ、お入りください」

小ぢんまりした社長室から声が聞こえた。所狭しに写真や書類、書籍が置いてあった。壁には達筆で書かれた今年のスローガンがかかっていたのが目にとまった。

企業の社長室を見れば、ある側面からその人物の一片を見ることはできる。このためソファに腰を下す数秒間、ぐるっと部屋を瞬時に観察をする。

椅子に座って挨拶を交わす。初めて目と目を合わせ、名刺交換をする。

瞬間的な印象は、白髪のおだやかな表情の学者風の紳士に映った。

出版社の方から今回の評伝を取材するいきさつ、内容の確認、発行時期など概略の説明があった。

その間、中沼社長は黙って静かに表情を変えることなく聞き役に徹していた。

私の方から取材の流れ、希望の資料などについて説明した。

やがて中沼社長はゆっくりと、話し始めた。

「安井学区自治連合会会長など地域の仕事が多いので、落ち着く暇がありません」

開口一番に自治会の話が出たので驚いた。

およそ一般の企業で地域、それも連合会の会長職を引き受けているトップは珍しい。こういう役職は現役を引退し、隠居している地元の名士が引き受けている。それでなくとも中堅企業のトップは時代の変化が激しいだけに、本業が多忙を極めているから、慇懃に断るのが普通である。

聞くと、自治連会長、右京交通安全協会会長など、地域の役職を数多く引き受けていた。まじめで実直な中沼社長は頼まれれば断れないというのだろうか。

地域活動に汗をかく、無償の奉仕活動は一般には考えられないほどしていることを知った。しかも会社の施設を地域に開放するなど、なかなか出来ないことであるが、地域との信頼関係を大事に考えているのである。

後でわかったことだが、中沼社長の母や妻も地域の民生委員を長年務め、貢献したのである。会社の創業者でトップの妻は、家庭のこと、夫や子どもの世話で多忙であるのに、二代にわたって地域の奉仕活動に熱心に取り組んできた。そのことを聞くに及んで、「ここまで地域に奉仕するのは何故か」と、思った。

取材を進めていく中で、ようやくその理由がわかった気がした。

中沼家はこの地で江戸時代の貞享年間（元年Ⅱ一六八四）から続く名家であった。一時、父親の代で没落して生活保護を受ける辛酸な生活を強いられたが、再び開花させた。

この地の中沼家の何十代にもわたる靈魂が眠っているのである。代々、当主は地域のために尽くしてきた。その連綿とした流れの先に中沼社長はいるのだという思い、自負心、誉れなどが凝縮しているのだろう。だから地域のことを頼まれると、本能的に引き受ける気持ちが起こるに違いない。

自らに厳しい中沼社長にとって地域との信頼関係は従業員との関係と同じであって、厳しさを超えたところで奉仕の精神は生まれたのであろうか。

本の最終につけた年表を見てもわかるが、中沼社長は納税義務を非常に重要視している。日本の企業の三分の一しか法人税を納めていない、とくに中小企業は少ない中で、これほど納税にこだわっているのも地域への奉仕とともに特筆される。

もちろん、中沼社長は地域の奉仕活動以外に、会社の事業経営で関係の深い日本スクリーン印刷資機材工業会理事、さらに京都中小企業家同友会では精力的な活動を行ってきた。

こうした多忙な人生を支えたのが職任一体のスタイルや食事も五分で済ませる早飯めしの発想であつたに違いない。

長期間にわたつた執筆もようやく終わろうとしている。

今夏も厳しい暑さに見舞われたが、中沼家の精神は健全な形で次代に引き継がれていくに違いない。この本から人間のあり方、生き方のようなものを感じていただければと願っている。

(二〇一〇年 夏)

あなたは社員の全能力を引き出せますか！

—

目次

はじめに

第一章 時の流れ 1

誕生 2

中沼家 4

離別 14

時代背景 24

第二章 波乱 29

母との別れ 30

中学校、高校の頃 36

やっと卒業したが 41

第三章 縁 47

運命の就職 48

いよいよ創業 60

自転車操業 73

生誕地に帰還 77

社員一号が花嫁 82

家業から企業へ 87

第四章 技術の流れ 93

原理は同じでも 94

アイズテクノロジーとは 105

芸術を印刷する……………112

第五章 事業拡大……………119

スクリーン印刷の多様化……………122

ユニークな社名……………125

本社新館着工の真意……………128

大阪にも工場を……………139

スクリーンからマスクへ（西京極工場）……………144

一大拠点の久御山工場……………153

世界の一号機を導入……………156

今、激変消滅の時代……………158

次なる飛躍に向けて（宇治工場建設）……………159

異業種交流	168
共同求人活動	177
あなたは社員の全能力を引き出せますか！	186
QC活動の道	193
京都にNASA誕生	200
スローガンに心をこめる	204
人をいかす経営	208
ピンピン商法	218
第六章 「魅力」創造	167

第七章 環境への取り組み……………223

考えよう……………224

紙ゼロへの闘い……………228

廃液処理の取り組み……………231

蛍光管類の処理、どうしますか？……………235

危険物の保管倉庫……………238

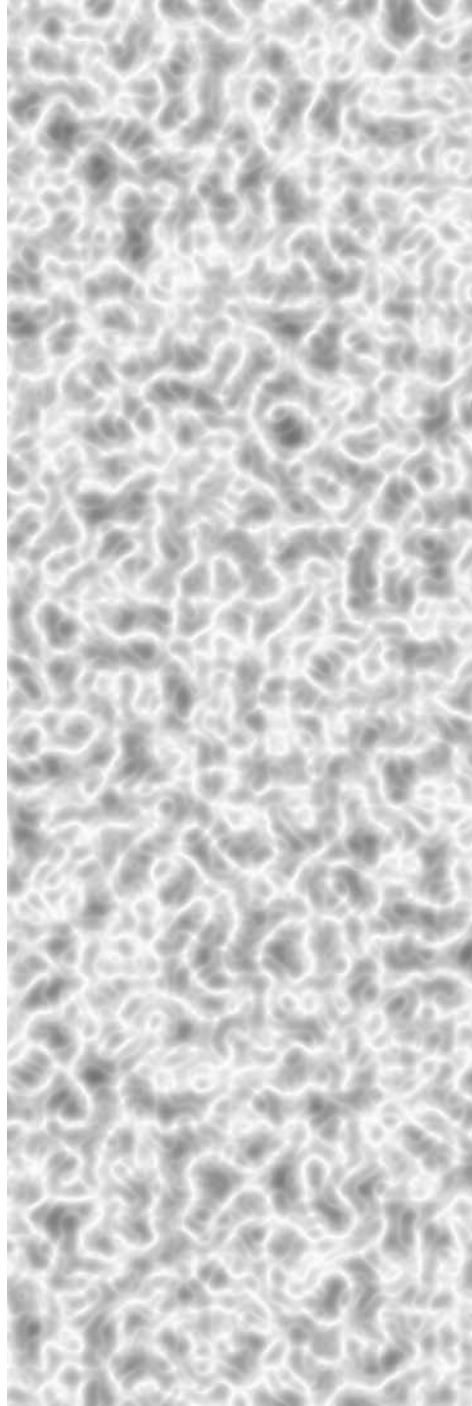
下水道排水の測定……………240

情報の共有化……………242

地域環境の美化活動……………244

第八章	トップ交代	247
	後継者育成	248
	これからの経営戦略	258
	あとがき	263
	年 表	267
	会社の概要	

第一章 時の流れ



誕生

この物語は中沼壽（なかぬま・ひさし）という人物の一代記である。そこには波乱万丈の運命が待ち受けている。天国から地獄へと転落、そこから這^は上がる人生模様は、われわれに多くのことを教えてくれる。

中沼壽は昭和八年（一九三三）一月一日、京都市右京区太秦安井奥畑町十三番地の豪農の家で父・守一と母・恵美子の間に生まれた。

その前の年の暮れ、恵美子は臨月を迎え、中沼家は例年になくあわただしい日々を送っていた。予定ではクリスマスの一週間前だと言われていたが、少し遅れ気味だった。

新年を迎えた午後、激しい陣痛に襲われた。

「元氣な男の子ですよ」

産婆が別室でそわそわしている守一に告げた。

「そうか、男の子か。よかった、よかった」

第二子（長男）の誕生であった。第一子は女の子（壽の誕生の翌年、死去）で、次はどうしても男の子を願っていた。当時は後継ぎとなる男児の誕生がないと、嫁は肩身の狭い思いをしたものだから恵美子も安堵した。

誕生日が元旦であった。

「本当の生年月日か？」

後年、よく聞かれた。当時、年の暮れに生まれても元旦として届ける人が少なからずいたからだ。

幼い頃、出入りの年輩者たちから「ぼんさん、あんたはんのお生まれやしたのは、予定日を十日ほど過ぎた元旦の夕方、午後八時頃で大変なことどしたえ」と、何度も聞かされたことを覚えていいる。それ以来、誕生日が元旦だということは間違いないと信じていいる。名前に「壽ひさし」と命名したのも、元旦というめでたい日にあやかりたいという名付け親である曾祖父の気持ちがあつたのだろうと思われるが、確かめたことはない。

内心では縁起のいい日に生まれたものだとして誇りに思わないでもなかつた。ただ、子どもの頃

は「お誕生日、おめでとう」と、祝ってもらった記憶はない。正月にはお年玉をもらい、凧揚げに興じたりしていたから当の本人も忘れるほどで、あまり気にしたこともない。

「ああ、あんたのお誕生日は、もうすんだんやな。忘れてたなあ。そやけど全国の人がお祝いしてくれたはるさかい、ええやんか」

正月気分が抜けた頃、母がそう言っただけでもなぐさめてくれた。その当時は今ほど、誕生日だといっても特別なことをする時代でもなかった。

中沼家

中沼家の地所は生まれる二年前まで京都府葛野郡かどの太秦村うずまさ字安井で無医村の土地であった。昭和六年（一九三二）の区画整理で新しく右京区ができ、編入された。安井の地理的な位置は右京区の東端で中京区に接している。JR嵯峨野（山陰）線の花園駅南側と地下鉄東西線・終点の太秦天神川駅北西側の間になる。



1歳の壽（昭和9年 自宅庭にて）

当時の安井は田んぼや竹藪^{やぶ}、茶畑の田園風景が広がる田舎であった。木立で覆われたところでは、コガネ虫やカブト虫が見られた。

西に御室川、南は三条通、北は新丸太町通（当時はこの通りはなかった）、東は名もない小道で町というより村落に過ぎなかった。住宅戸数も八百戸余りで地域のほとんどが田畑だったという印象が残る。

実家の周囲も田畑で今も住宅地の一角に散在している。西端の御室川の堤防に行くには小道にはえる草をかき分けて行かなければならなかった。三条通から南の西京極までは背の高いポプラ並木の小道や竹藪^{やぶ}が続いていた。御室川やその支流の天神川も曲がりくねった小川で、土手があつて今よりも川幅も狭くメダカが泳ぎ、夜はホタルが飛び交うのどかな地域だった。

中沼家は明治維新までは姓を加藤、名

を喜平衛と名乗り、代々、加藤喜平衛を屋号として襲名していた。江戸時代の貞享年間（元年
一六八四）から続いていたことを記した位牌と墓石も見つかっている。墓石の多くにも加藤
姓で残っている。親類一族はすべて加藤姓である。

加藤姓から中沼姓に変わったことについて、『京都府議會議員録』に掲載されている。

親類をはじめ在郷の百姓、小作人らが自家の母屋を「中の間」と呼んでいた。明治維新で新
政府が、新たに戸籍を編纂し、旧来の氏（姓）と家名（苗字）の別を廃して、全ての人が姓名
を公式に名乗ることができるようになった。そこで通称の呼び名だった「中の間」をもじって
中沼に改姓したという。

中沼家は太秦一の大豪農で名字、帯刀を許された地主として君臨していた名家であった。母
屋の敷地は二条通に接した五百坪を超え、立派な土蔵、ひなびた茶室のある庭園などを持つ大
邸宅である。広大な田畑や山林を所有し、多くの小作人が出入りしていた。また母屋にはお手
伝いも多く住み込み、中沼家の家族の世話をはじめ仕事を手伝った。

父親が相続した時の書類で試算したら、現在の価値で六百五十億円にもなったそうだ。

中沼家は代々、庄屋（村役人）で葛野郡（現在のほぼ右京区全域）の郡農会長や太秦村の村

長を務めた由緒ある旧家であった。敷地内には剣道の道場も建て、在郷の人たちに武徳会仕込みの剣道を教え、周囲には武徳会の師範の住まいが並ぶほどの盛況ぶりを誇っていた。

近くには海軍大将の鈴木貫太郎の末弟の実家もあった。

「あの中沼はんどすか？」「ひよっとしたらお宅は安井の方と違いますか？」

今でも中沼壽を名乗ると、思わぬところで高齢の人たちとの話に出てくるそうだ。

——安井中沼にはほうきは要らぬ。お初娘（曾祖父のおば）が裾で掃く。竹になりたや安井の竹に、安井中沼の（屋根の）樋竹に——

こんな歌を覚えてくれたが、それほど名の知れた家柄だった。

そんな旧家に生まれたが、父・守一の代で崩壊したのである。

父・守一は明治四十年（一九〇七）の誕生の年に父親（壽の祖父）を亡くし、さらに八歳で母親（壽の祖母）と死に別れたのである。

このため祖父母（壽の曾祖父母）に育てられた。いわゆる乳母日傘で甘やかして育てられた。

お坊ちゃん育ちだったので、成人しても幼児性を残し世間知らずのお人好しのわがまま大将であった。

そんな父・守一のもとに母・恵美子が嫁いできた。

恵美子の実家の久保家は京都市左京区岡崎にあったが、その後、左京区一乗寺出口町五番地に移った。明治四十二年（一九〇九）生まれの母・恵美子は女三人姉妹と末弟、四人の次女であった。錦林小学校の特別進学クラスに編入されるほど、学業優秀な生徒であった。

当時、経済的に恵まれない市職員の家庭であったため、進学を断念しなければならない状況だったが、両親が小学校の担任に説得されて進学を許した。

京都で難関校であった旧制の京都府立京都第一高等女学校（現・府立鴨沂高等学校）、略称「府一」に入学したのである。卒業後、武術教育による精神鍛錬を行う武徳会で薙刀なぎなたの師範として活躍した。

守一の方は紅葉の寺として有名な真言密教の永観堂内にあった旧制の私立聖峰せいほう中学校を出ていた。安井にある中沼家の菩提寺の本山が永観堂であった。武徳会から聖峰中学校へ武徳会の師範を派遣していた。



小学校入学時の壽

(昭和14年 母・恵美子, 弟・武, 妹・玲子と)

二人を知る武徳会の教師が、同じ武徳会に所属する中沼守一を恵美子に紹介したのである。「月とすっぽんのようやな」

恵美子の両親は同じ武徳会の師範とはいえ、家庭環境があまりにも不釣り合いであることを危惧して猛反対したのである。

逆を守一の方は「府一卒の頭のいい嫁をもらうんだ」と見栄をはり周囲に豪語していた。育ての親でもある守一の祖父・誠一郎は恵美子の両親に三顧の礼を尽くして説得した。

「お母さん（恵美子）は子どもの頃からあれほど勉強が好きで、よくできたのに、その子どもの壽はどうして勉強熱心ではないの…」

母親の父母、つまりは壽の

祖父母らからは機会があるごとにばやかれたことが、昨日きのうのように思い出される。夫と離婚して実家に戻った母は針仕事で着物をつくって家計を手助けしていたが、裁縫で使う二尺のモノサシでたたきながら子どもに勉強も教えた。

母・恵美子が嫁いだ頃、大地主の中沼家も時代の流れの中で徐々にじり貧状態になりつつあった。

壽の幼年期、父親が道場で羽織袴はかまに身を固め、弟子たちに剣道の稽古けいこを指導するのを見つめていた姿が脳裏に浮かぶ。夕方になると、仕事を終えた百姓たちも子どもを背負って道場の窓からのぞいていた。夏には滋賀・近江舞子の浜辺にテントを張って合宿、稽古を続けた。

常時、二十人前後の門弟たちが掛け声をかけ合って稽古に打ち込んでいた風景があった。子どもには幼かったためか剣道を勧めなかった。

武徳会に水泳部があったので、子どもらはその中で水泳を習った。

「輸送船が沈んだ時に、泳げなかつたら死んでしまいます」

母がそう言って習わせた。琵琶湖で遠泳に出かけるほど上達していたので、高校では水泳部に籍を置いたこともあった。

すでに家督を相続していた父・守一は、中沼家の再興をかけていろいろな事業に手を出し始めた。

ある時は大阪で映画館三館を経営していたかと思えば、時と場所を変えて神戸で外人専用のホテルを手掛けた。その頃、父・守一は家にも帰らず、神戸や大阪を転々とする生活を続けていた。大きな屋敷には母親、曾祖父と壽、弟、妹の家族五人とお手伝い三人の計八人が暮らしていた。

「私が知っているだけでも父は十指に余るほど、業種を変えていきました」
息子の壽は回想している。

仕事を変えることに逸財を繰り返した。事業も経営も経験していない父・守一はお人好しの性格も手伝って時には騙され、今のように銀行融資も手薄であったため、高利貸しのカネに手を染め利息の支払いに追われた。ついには田畑や山林、最後には家、屋敷や家財まで手放すことになっていった。十年余りですっからかんになったのである。それにしても守一はよくぞ大金を使い果たしたものだど、怒りを通り越してあきれるばかりだった。

きまじめで物事のけじめをはっきりさせる性格の母は、結婚当初から夫の守一には位負けし

ていない気丈夫なところを見せていた。

「慣れないことをせずに、祇園や上七軒の花柳街で遊ぶだけなら、なくなるような財産ではなかった」

母は長男の壽によく愚痴をこぼした。どれだけ悔しい思いをしたか、壽は心を痛めた。夫・守一は理詰めで妻から問い詰められるほどに、反論もできなかつた。

息子の壽は手足に青いあざをつくっている母が可哀そうに思えたが、どうするすべもなく、悲しみの塊が内面にへばりついていった。

小学校に入る前に近くの知り合いが、子どもの夏休みを利用して故郷の安芸・宮島へ帰るのに同行したことがあつた。

新幹線もない時代で早朝、京都駅を出発、広島に着くと、とつぷり日が暮れていた。車中で立たないと外の景色が見えず、座ると電線と空だけである。電線は緩みをもたせているので、電柱の近くで上がり、真ん中で下がっている。道中、ぼんやりと電線の上がり下がりを見る退屈な時間を過ごした記憶が残っている。

宮島駅の船着場に着く頃、雨が降り出し、アスファルトの道路沿いに並んだ土産物屋の明か

りが濡れた道路に映っていたのが印象的だった。琵琶湖汽船に乗ったことはあったが、瀬戸内海とはいえ、海で船に乗るのは初めてだった。雨の降る真つ暗な海を宮島に渡った。船着場から厳島神社の方へ歩き、少し手前で左折すると、すぐ細い道沿いにその家があった。

しばらく滞在していると、子ども同士が退屈なことからケンカをした。腹を立てた壽は先日、連れて行ってもらって知っていた四キロも離れた親戚の家まで歩いて出かけた。壽が消えたことを知った知り合いの家では大騒ぎになって島中を探し回った。

逃げ込んだその親戚では黙って出て来たわけではないだろうと思って、潮干狩りに連れて行った。

「潮干狩って、何を食べさせてくれるのか？」

京都にいて海を知らないのです、潮干狩りというものを何かおいしい食べ物だろうと思ってついに行ったことを覚えてる。

「まさか、あの親戚の家までは行っていないだろう」

京都の実家で連絡を聞いた壽の父が宮島に迎えにやってきた。やさしい父の一面を見た最初で最後であった。

「どうもなかったか？ 心配したぞ」

幼い頃の記憶が断片的であるが、鮮明に脳裏に焼き付いているのは、それだけ緊張した体験だったからだろう。

離別

やがて父・守一の育ての親である曾祖父の誠一郎が享年八十歳で亡くなった。母の恵美子は夫・守一以上に、誠一郎のたつての願いで嫁いできただけに寂しさがこみ上げた。

「恵美子さん、どうか実家へ帰らないでほしい。お前さんがいなくなると、この家は潰れる」
曾祖父の誠一郎は生前、母・恵美子に懇願した。

事業に失敗した父・守一が、一度だけだったが暴力をふるったことがあって、曾祖父の死去から二年後、後ろ髪を引かれる思いで里帰りの決意を固めた。

曾祖父は壽を孫のように可愛がった。また、読み書きが堪能で、死ぬまぎわまで習字を教え

た。その影響で書道が好きになり、高校で書道部にも入部した。後に日本書芸院展で特選に選ばれ、京展でも入選するなど、子どもの頃からの指導のおかげだと感謝の念を忘れたことはない。日本書芸院から同院師範の免許を拝受する時、曾祖父の号・雪耕の一字をもらって中沼青畊としたところにもその気持ち表れている。

学校が休みの日は、あちこちに連れて行ってくれた。神戸の湊川神社、奈良方面にも行った。曾祖父は歴史が好きで奈良の町を歩きながら奈良時代の歴史も話してくれた。大阪・桜井の里で河内の武将・楠木正成の話をしてもらったことも鮮明に覚えている。

そのことがあったからかどうか、成人になって京都の時代祭やパリとの姉妹都市盟約四十周年の平成十年（一九九八）、パリ市内を巡行した時代祭で楠木正成役に扮して参列したこともある。いずれにしても遊び心もっている。

それは時に親しみのある人柄となっていたのではないだろうか。

京都では行かなかった寺院がないほど、見学を重ねた。

曾祖父の誠一郎は学務委員をしていた。戦前、公立小学校の教育事務を担当するために市町村に置いた常設委員で、国民学校の前身である太秦第二尋常小学校の建設で大いに奔走したと

伝え聞いている。この学校へ壽、妹の玲子も通うことになる。

父・守一が太秦第二尋常小学校の開校時や大水害の様子を、九・五ミリ映写機用フィルムで撮っているのが残っている。

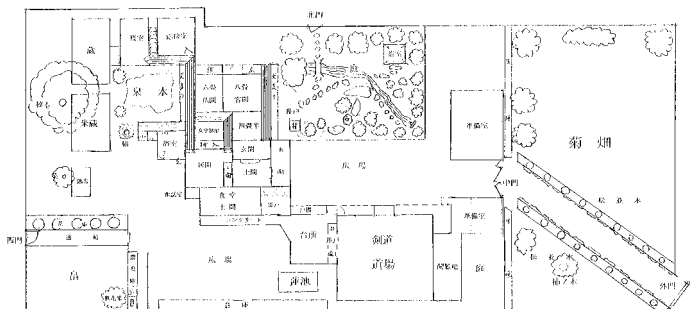
また、日韓併合で多くの朝鮮人が安井にも住んでいたが、彼らの生活水準は低く困窮していた。誠一郎は裸足でみすばらしい服装の子どもたちに心を痛め、靴や衣類を買い与え、時には壽ら日本の子どもと同じ弁当を持たせて、滋賀県の南郷洗堰へ見学に連れて行った。

おそらくこの時期の曾祖父から受けた家庭学習は、壽の人間形成の上で無意識のうちに大きな役割を果たしたものと推察できる。成人して事業展開する中で優しさ、思いやりといった慈しみの心が醸成されていったように思われる。それは育ちの良さのようなものとして発現している。心根にそうした慈しみの心が根付いているからこそ、この先、地獄のような状況になっても健全な心を失うことなく根性論を堅持できたのであろう。

そのうち家、屋敷を失った中沼家は、父が不在なため母の実家に身を寄せることになった。

壽少年の記憶では、父は弟の武が生まれて三年後の昭和十五年（一九四〇）には家に不在だった。時代は日中戦争から世界大戦へと戦雲が国土を覆い、軍靴の足音が高まっていた頃である。

第一章 時の流れ



昭和17年まで過ごした太秦安井の中沼家屋敷図

昭和十七年（一九四二）十二月五日、ついに生家を離れる日がやってきた。壽がこの家に住んだのは十年間だった。平和な時代でも親の別離は悲しいが、戦時体制でしかも財産をなくし、どん底の中で女手ひとつでやっていかなければならないことを考えると、母・恵美子の胸は裂ける思いであったに違いない。

その日の朝、まだ日が昇らない暗いうちから、多くの手伝いの人たちが太秦の屋敷にやってきた。大人たちは悲しみに沈んでいた。朝の底冷えがこたえた。せめて寒さを和らげようと、庭先で焚火^{たきび}を囲んで身体を温めながら母や壽兄弟らの荷造りをした。

母の実家は一乗寺にあった。家には祖父母、独身の伯母（母の姉）、叔父（母の末弟）の四大家族であったので、中沼家の家族四人が身を寄せれば、どれほど大変なことがわか

つていただけに、文句ひとつ言わずに親切にしてもらったことは、生きる勇気を与えられた。

壽は安井国民学校の四年生、そして年齢は二歳しか違わないが、早生まれと遅生まれの關係で妹の玲子は学年が三学年下の一年生、四歳下の弟の武は学業前であった。国民学校生の二人は、母の実家がある一乗寺から安井国民学校へ通った。まだ朝も暗いうちから妹の手を引いて家を出て、市電の円町駅から学校までの一・五キロ、下校も市電の高野終点から一乗寺下り松の家まで真つ暗な中、田んぼ道一・五キロ、家と学校まで合わせて徒歩三キロ、往復六キロの道程であった。

その当時の冬は積雪量も多く、寒い雪道を膝まで雪に埋もれながら歩いた。ズボンがずぶ濡れになった。さすがに見かねた母は、翌年一月から妹だけを近くの北白川校に転校させた。壽の方は三月末まで安井校へ引き続き通わせた。

「母は安井校で卒業させたかったのだろう」

そこには安井の地でもう一度、中沼家を再興したいという願望があつて、息子の壽以上に未練が残っていたのではないかと述懐している。

結局、壽も翌年四月、北白川国民学校に編入したのである。

一乗寺地区の学校は修学院国民学校だったが、府立一中に入るためにレベルの高い北白川国民学校に越境していた。近所の同級生とは学校が違ったので、遊ぶことはなかった。

やがて母は三人の子どもを残して単身、満州へ出かけることになった。

妹の夫が満蒙開拓義勇団の青年学校校長となつて赴任していた。これは満州国（中国東北区）の開拓を目的とした移民団で、妹も同道したのである。現地で妹のお産を手伝うために、母・恵美子は渡満、京都駅に母の父親と見送りに行ったが、帰り道は寂しい墓地の中をわざわざ通つて一乗寺の家まで帰った。

「寂しさに耐えさせるためだったろう」

壽はそう述懐する。

母・恵美子がお産を手伝つて帰路につくために予定していた連絡船が米国の潜水艦に撃沈され、母は帰りの連絡船になかなか乗船できず半年ほど足止めされ帰れなくなった。

あの頃、満州には電話がなく電報での連絡だったが、紙質も悪くよく読めない。最後は手紙で事情がわかった。

帰路は駆逐艦に護衛されながら甲板で救命胴衣をつけて、今の関釜フェリーのコースを八時

間かけて九州に帰り着いた。

戦況は日増しに悪化して不利になっていった。

一乗寺に移り住んで二年後、満洲から帰った年の暮、元気で医者いらすの祖父が風邪をこじらせて急逝、祖母も後を追うように亡くなった。伯母（母の姉）は北白川に転居して行った。

このため母の実家には中沼家の家族四人と叔父（母の末弟）の五人となった。

昭和二十年（一九四五）五月になると、叔父が嫁をめとったが、その月の内に軍隊に応召となった。このため家族は残った叔父の嫁と同居するかたちになった。そのうち母が病に倒れ、生活保護を受ける事態になったのである。

当時、多くの国民は、とくに民間人は赤紙一枚の召集令状に内心では怖れた。この頃になると日本が連合軍の攻勢に押されていることが、国民にも感じられていたので、戦地へ赴くことは死への道を意味していたからだ。

幸い中沼家は政府との関わりの深い武徳会に所属、剣道の師範で警察学校や小学校に剣道を教えていた関係があったからか、父親の守一は徴兵を受けずにすんだ。母の弟も従軍したが、内地に残れたので中沼家の関係者らは戦死を免れた。

母の実家では近くに土地を借りて、小さい身体で肥樽をかついで運び、にんじん、さつま芋などいろいろな野菜をつくった。

「たいがいの野菜をつくりましたが、猪に食い荒らされたこともありましたが」
小学生だった頃のことを思い出していた。

日に日に食糧不足が成長盛りの子どもらを苦しめたが、幸い自作農園で空腹の腹を満たすことができた。

米軍の爆撃機が頭上高く飛び空襲警報のサイレンが鳴り響く中、新田辺へさつま芋の買い出しに出かけたこともあった。当時はカネよりも芋の蔓が喜ばれるほど、食べ物に飢えていたが、都心の子どもよりは、多少恵まれていたようだ。

一乗寺にいた頃から続けていることがある。

叡山電車の一乗寺駅を下車、徒歩十五分、一乗寺下がり松のところに狸谷不動院がある。宮本武蔵が心の剣を磨いたといわれる武蔵之滝があり、修行場として信仰され交通安全、厄よけ祈願で知られる。二百六十二段の石段がある。

「狸谷のお不動さんにお参りしてこないと、朝ごはん食べさせない」

昭和十九年（一九四四）に亡くなった母方の祖母に言われたので弟、妹の三人は毎日のように出かけた。

当時はみすぼらしい祠であったが、母の実家の隣組だったマッサージ師が神主になった今は、立派なものになり人気が出ている。仕事を五十五年続けうまくいっているのです、お参りをやめられない。今も毎月一日にお参りに出かける。十二月だけは大みそかの夜十一時に行くが、通常月は朝六時半に家を出て始業時間の八時前に帰る。

仕事は五十五年、お参りは六十年以上続けていることになる。

「信仰ではないが、健康のために行きます」

元気でないと二百六十二段の石段は上がれない。

経営者は孤独な職業であるから多くの経営者は寺院に寄進するとともに、祈願の習慣を身につけている。この安らぎの時間に決意を新たに活動している人も少なくない。

中沼社長も静寂に浸りながら、アイデアを想念することも少なくないと思われる。狸谷不動院には記念にと息子二人と妻・和子の名前を彫った石柱を寄進している。ただそれだけのことだが、人は案外、こういう浄財寄進によって精神の安寧を得ているのだらう。

もう一つ、その頃、身につけたことは自炊である。祖父母が亡くなり、母が病気で寝込んだので戦争中から自炊せざるを得なくなった。

「畑を耕し野菜を育て、山で薪や松かさを取ってきておくどさんにくべてお粥づくりをしました」が、苦労と思わなかったそうだ。

後年、妻が病気になって以来、自宅でも食事は自分でつくっている。あと二年で金婚式を迎える平成十六年（二〇〇四）一月、妻が亡くなったが、今もカレーなどをつくり、自宅で孤食の日々を過ごしている。

「昔とつた杵柄きねづかです。何の苦痛も覚えません」

最近が高齢社会で、経営者の中にもたとえ夫婦が健在でもそれぞれの思いで余生を送るため、食事と一緒に食べない独居者が増えている。そのため外食することが多くなり、孤食に寂しさを覚える話も聞く。その点、中沼社長は自炊できるので、そういうことで悩んだことはないという。

時代背景

人は時代の子であるのは自然の成行きだが、時代の状況によって家庭環境や育ち方も影響を受ける。さまざまな要因が絡んで人間形成に作用する。これが正解だというものがないので、親は子育てで苦勞することになる。壽が生まれた時代は彼の人生で大きな意味をもつ。

彼が生まれ育った「昭和」という時代は、激動という言葉通りの変遷だった。

まず金融恐慌が襲ってきたのである。もちろん京都経済にも大きな影響を与えた。

京都の産業といえば、昔も今も弱ったとはいえ繊維の街である。それも織りや染めが主流で、その頃、市内主要工場のうち、繊維関係が五割以上あったほどで、文字通り繊維王国であった。日本の経済は第一次世界大戦後の大不況、関東大震災、昭和金融恐慌によって一段と弱体化したが、回復への兆しも見えつつあった。

ところが昭和四年（一九二九）十月に「暗黒の木曜日」と名付けられたウォール街のニュー

ヨーク証券取引所の株価大暴落が追い討ちをかけ、世界恐慌に陥ってしまった。日本経済も不況に逆流、恐慌へ加速させた。

やがて大恐慌の嵐は去ったが、それと引き換えに軍事費が増大した。

日中戦争の勃発以降、政府は戦争遂行のため国防優先の政策を打ち出し、産業は軽工業から重工業中心へと再編され、経済は統制色を色濃くしていった。

壽が生まれた昭和八年（一九三三）に、日本は国際連盟を脱退、緊張感を高めた。太秦第二尋常小学校に入る年に第二次欧州戦争が勃発、やがて世界大戦に拡大、日本も参戦することになる。

このため壽が少年の頃は、戦争が華やかで賛美された時代であった。

「相手が中国一国の時は連戦連勝で、提灯行列や旗行列が繰り返し行われ、余裕があった」
少年の気持ちにもはっきり映っていた。

邸宅の裏にしのべの竹藪たけやぶや田畑が広がり、その先にフィルム会社の工場があった。工場の置き場に捨てられる不要のパッキングベルトをつけ、背納にして日の丸を貼って背中に背負い、兵隊ごっこでのしのべの竹藪を走り回って遊んだ思い出もある。

その頃、所有の山林を手入れするために、出入りしていた大勢の小作人と台八車を連ねて高雄方面の四谷山へ何度も同道し、昼の弁当はイワシかアジの開きにごまをまぶしたものを現地で焼きながら食べた記憶も蘇る。

秋の季節には台八車に松茸がいっぱい入った四貫かご（十五キロ）を五、六杯積んで持ち帰ったこともあった。松茸も当時は貴重品ではなかったのである。

関西での連合軍の爆撃はやはり軍需工場の多い大阪に集中した。

大阪への空襲は、米軍による無差別攻撃で昭和二十年（一九四五）三月十三日深夜から翌日未明に最初の空襲が行われた。その後、七回の空襲を繰り返し、大阪市内はほぼ全域が焼失した。

金剛山麓の武将・楠木正成生誕の地として有名な千早赤阪村から、燃え上がる大阪の街が真っ赤な夕焼けのように見えたという。やがて沖繩上陸、八月に人類史上初の広島、長崎への原子爆弾投下とソ連参戦で敗戦の日がやってきた。占領下、進駐軍のジープがさっそうと日本各地を走り回り、米兵が放り投げるチョコレートやチュウインガムに子どもたちが群がった。

庶民は、食べることだけが生活のすべてであった。

空襲をほとんど受けず無傷と言われた京都も荒れ果てた街に変わり、生活物資の不足、食料品の欠乏、食べることに事欠く混乱そのものであった。

当時の世情は平成二十年（二〇〇八）秋のサブプライムローンの崩壊や米国第四位の証券会社・リーマンブラザーズ破綻に端を発した世界同時不況の比ではなかった。派遣切りや失業が大きく報じられたが、敗戦後の餓死や病院不足はニュースにならないくらい日常茶飯事であった。

そうした殺伐とした世の中で日本人の心の支えになったのが歌声であった。

昭和二十年（一九四五）十月、戦後初の映画『そよかぜ』が封切られる。ヒロインは並木路子。その主題歌の『リングの唄』が大ヒットした。

彼女の兄は戦死、東京大空襲で母、敗戦の引き揚げで父を亡くしている、いわば戦争孤児だった。それだけに食べたことのないリングに託した情感こもる歌声は、疲弊した日本人の乾ききった心にしみとおるように流れた。

若にこの曲が溢れ、やがて繁華街の新京極では今まで鬼畜米英と叫んで排斥していた英語やジャズのメロディーが流れ始めて、『リングの唄』を圧倒するようになる。ラジオから「カム、

カム、エブリボデイ」の明るい英会話の放送が流れ出した。日本人の変わり身の速さを見る思
いである。

敗戦の翌年には新しい憲法が公布され、天皇は自ら戦前の神性を否定、人間宣言の詔書を発
表したのである。百八十度の転換である。この憲法を巡っては今も議論の尾を引いている。

そうした中でも、とにかく国民は食べ物を得ることがなによりも急務で、農村へ買出しに出
かけた。一方、違法であった闇市が繁昌したが、とにもかくにも懸命に生きたのである。

こうした世情にあったが、青少年には断片的に記憶に残っているだけであった。まだ悲壮感
を覚える年頃ではなかった。むしろこれから以後に苦労がやってくるのである。それでもこの
時代を生き抜いた事実は消えることがなく、心のひだに記憶されている。